

第1節 富士山修験

清雲 俊元（山梨県文化財保護審議会会長）

奈良・平安期の修験

富士山は奈良時代末期から平安時代にかけて十数回の噴火の記録が史料にみられるが、永保2年(1083)を最後に休止期に入る(扶桑略記)。この頃から修験による富士山への登拝活動がはじまった。修験は山岳信仰の中の宗教活動の一つで、特に富士山との関わりについて捉えてみた。

一般的には修験道は日本古来の山岳信仰が外来の密教・道教・儒教などの影響のもとに、平安時代末期に至って一つの宗教体系を作りあげたものである。このような修験は特定の祖師の教えに基く宗教とは異なり、山岳修験の修行によって呪術を獲得した実践的儀礼を中心とした宗教でもある。

富士山修験者の最初にあげられるのは、後世修験の開祖として崇められた役小角である。役小角は葛城山で修行した山林修行者の一人である。富士山にも役小角の登拝伝説がある(『日本霊異記』)。小角は舒明天皇6年(634)正月元旦大和国葛城上郡茅原村に出生した。7歳にして仏法を信じ、30歳の時、葛城山の岩窟に入り二十年間孔雀明王の法を修した。文武天皇の時、葛西山中にて修行して金峰山と葛城山との間に橋を架け渡らせたとある。また韓国の連広足は、小角の妙術を妬んで天皇に讒訴し、そのため小角は伊豆の大島に流刑に処された。小角は昼は伊豆におり夜は富士で修行したという。このように小角は奈良時代から傑出した呪術者、験者として伝承化されていた。

富士山への登拝については、貞観17年(875)頃に著わした都良香の『富士山記』(『本朝文粹』)に「昔役の居士といふもの有りて、其の頂に登ることを得たりと」あるので9世紀末には役小角登拝伝説があったことは事実であり富士山には既に修行者による登拝がみられた証左でもある。やがて平安時代の末から鎌倉時代になって、大峯山や熊野、富士山などに修験者が入り修行の拠点となっていったと考えられる。役小角は、彼らの理想とする修験者として崇められ修験道の開祖役行者と呼ばれるようになった。後述するが、甲府市の円楽時所蔵の役行者及び前鬼後鬼像(鎌倉時代前期)や、甲州市大善寺所蔵の役行者像(鎌倉時代末期)は富士山との係わりがあり、富士山修験が平安時代後期から活躍をはじめていた一つの証左でもある。

初期富士山修験

富士山をめぐる縁起や記録に名をとどめている古い修験として伊豆国(熱海市)の伊豆山権現(現在の伊豆山神社)の修験があげられる。伊豆山神社の『走湯山縁起』(『群書類従』第2輯)によると承和3年(836)、甲斐国八代郡竹生の住人賢安が伊豆国に赴任していたとき、走湯権現の靈験を得て本地仏の千手観音像や仏堂を造営したのが同社のはじまりとされる。また彼は出家して賢安法師と称したといわれる。この神社の祭神は『延喜式』神名帳には火車須比命にしている説と、『伊豆国神階帳』によれば正一位千眼大菩薩とあり、浅間大菩薩を祭神とする説がある。この神社は後に富士山修験として活躍する末代をはじめ村山修験の発生の地であり、富士山の祭神浅間大神は女神といわれるが、その女神像の造立にかかわってくる。

賢安について『甲斐国志』巻77の福光園寺の項をみると「保元年中(1156～58)賢安上人ヲ中興開山」とあり走湯山の賢安とすれば時代が符号しない。国志の年号が誤記であって平安時代とすれば注目すべき内容である。またこの『走湯山縁起』の末尾をみると「于時延喜四年甲子九月十八日 大教王護国院 定額僧阿闍梨豪忠記 延敦闍梨上綱良宣全」とあり、延喜4年(904)賢安は大教王護国院(東寺)に関係する真言宗の僧侶ではなかったかとも考えられる(『山梨県史』資料編3)。

また福光園寺は黒駒にあり、黒駒というと「富士山図」で最も古いもので奈良法隆寺東院絵殿の壁を飾っていた(現在、東京国立博物館収蔵)、延久元年(1069)制作の『聖徳太子絵伝』中に見られる太子像が、甲斐の国から献上された黒駒に乗って富士山頂に登ったという伝説が描かれている。この太子が乗ったという黒駒の産地が福光園寺の周辺である。甲斐国造の出した馬は中央で甲斐の黒駒と呼ばれて著名であった。この寺は、往古は駒岳山大野寺と称し黒駒牧の旧地(『甲斐国志』巻41古跡部第4)と呼ばれている。寺には聖徳太子伝説も伝えて

いる。この御坂の地は甲斐の国司の庁所である国衙が和名類聚抄によれば八代郡とみえ今日の笛吹市御坂町国衙の地を指すのが通説であり、その他にも一宮町国分説や、同市御坂町金川原の方八町の地に注目する説などがある。また福光園寺に現存されている「吉祥天及二天像」(重要文化財)は寛喜3年(1231)に仏師蓮慶により造立されたもので像内の墨書によると、大野寺(現福光園寺)の第3世良賢聖人が大勧進となり当時の国守と考えられる藤原定隆を中心に檀越檀越官人の三枝氏が名を連ねていることから、大野寺は国衙に最も近い寺院であり、国司や檀越官人とのかかわりのある唯一の尊像である。また当時この黒駒一帯から名馬を産することから11世紀の初頭、富士山登拝が盛んになるに伴い聖徳太子伝説が生まれたのではないかと考えられる。また賢安の出生は10世紀の初頭で立証する資料はないが伊豆山権現縁起をみる限り、甲斐・伊豆・京都との関係をもった僧と考えられるが、ここでは次期の研究を待ちたい。ただ富士山信仰、とくに祭神である女神像の出自と登拝修行については賢安が初期の修験と考えられる。それは後の村山修験の登場をみても女神像さらには神仏習合から発展して村山修験の成立をみるにつけ伊豆山権現とのかかわりが大きい。

伊豆権現と修験

走湯山の修験と富士山への登拝は末代上人が有名であるが、伊豆山権現は承和3年(836)ごろ賢安によって創立してまもなく登拝が始まったと考えられる。それは都良香の『富士山記』をみても前述の通り役行者の登拝をあげているがこの時代すでに富士山登拝は行われていたことを指摘している。『本朝世紀』(藤原通憲編纂)によれば、金時(年次未詳)、賢薩(983)、日代(1059)など、村山修験が富士山の山頂を極めたことが見え。末代上人以前のことが明らかになった。これは西岡芳文著『興風』22号の「富士山をめぐる中世信仰」などに詳細があるが、この論拠は金沢文庫所蔵『称名寺聖教』の「浅間大菩薩縁起」によるものである。従って最初に富士山に修行の場を求めたのは末代に代表される走湯山に本拠を置く修験達である。

末代は『本朝世紀』久安5年(1149)の記事によると「富士上人」と称され、富士山への登拝は数百度に及び修行を繰り返し、一切経を書写して富士山頂に埋納することを発願した。その実現のために東海、東山両道の人々に勧進して4696巻の経を書写した。大般若経600巻が残ったので鳥羽法皇の結縁を獲得したことが伝えられている。末代は、頂上に大日堂を建立したことが『本朝世紀』(久安5年(1149))の条に見える。

これは奈良時代からすでに発生した日本固有の信仰と外来の仏教信仰との習合の思潮である「神は仏法を悦び擁護する」という「護法善神」の考え方がおこり、更に神は仏の化身(権現)とする本地垂迹思想があらわれ、平安末期には富士山にも入って来た。

富士山の御神体は浅間大菩薩で、その本地仏は大日如来と定められた。大日如来は摩訶毘盧遮那といい、太陽をあらわし、偉大なる光の如来ともいい、宇宙の真理を仏格化した仏である。大日如来には金剛界、胎藏界の大日如来がある。金剛頂経に基づき仏の智徳、智慧を示したのが金剛界大日如来で、金剛界曼荼羅の中尊で智掌印を結んでいる。また理徳、慈悲の面を示していたのが大日経に基づく胎藏界大日如来である。とくに胎藏界は母胎を現すともいい、胎藏界曼荼羅の中尊に位置し、法界定印を結んでいる。

末代が浅間大神の本地仏を大日如来とし、富士山を浅間大菩薩即大日如来とする神仏習合思想に基づく信仰を説くまでになみなみならぬ苦難があった。鎌倉末期成立の『地蔵菩薩霊現記』に伝えている。その内容を見ると「垂迹浅間大菩薩 法体は金剛界廬舎那の応作、男体に顕れ玉ふべきに、女体に現じ玉へり。然れば即本迹各別なれば末代に不信の衆生多くして 二仏の中間に迷い、済度も覚束なく思し奉る。

所詮我捨身の行を修め、後代の不審を晴さんと思立て、御岳の半上座して樹下石上にして百日断食して、正しく神体を拝み奉とぞ祈りぬ」。この『地蔵菩薩霊現記』で言っていることは浅間大菩薩の本地仏は金剛界毘盧遮那、すなわち金剛界大日如来であり男体(金剛界大日如来)であるはずなのに、女神を浅間大神として祭る浅間神社側とは考えが異なり女体(胎藏界)の大日如来を本地仏としなければならなかった。末代はこの問題を解決するため富士山中で百日の断食行をおこなったが、大日如来の世界は男女を超越した世界であることを悟られたのである。そのため富士山に勧請された大日如来像は、金剛界、胎藏界両部の仏像が造立されるが、末代が最初に富

士山頂に建立した大日堂の本尊については不詳であるが、南面の村山浅間神社の13世紀の胎蔵界大日如来をみるにつけおそらく胎蔵界にこだわったと考えられる。

また北面の内野浅間神社の鎌倉時代前期の制作と伝える大日如来をみても胎蔵界大日如来であることは、いかに浅間大菩薩が女神であることにこだわっていた證左ではないかと思う。中でも村山修験の拠点となった村山浅間神社(静岡県富士宮市)に祀られた正嘉3年(1259)銘の大日如来は、総高97.5cmの等身の像で法界定印を結んで坐す胎蔵界大日如来である。脚部裏に正嘉3年、仏師聖運造立の銘文がある。また異筆で天保15年(1844)の修理墨書銘があるが『村山浅間神社調査報告書』(富士宮市教育委員会)によると軀幹部と脚部は別作の可能性があり、脚部周辺が正嘉3年で頭体幹部は平安時代後期の古様式が見られると指摘している。平安時代後期の作とすれば、南面の浅間神社の浅間大神の本地仏としては最も古い像と考えられる。また現在村山浅間神社の中尊として祀られている木造大日如来像は、文明10年(1478)渡邊行忠ならびに息子の作とある。本像は本地仏大日如来像で前記の胎蔵界大日如来と対になる金剛界大日如来像である。三昧目の木造大日如来像は法界定印を結ぶ大日如来像で室町時代末期の作(『村山浅間神社調査報告書』)とみられる。

このように神仏習合時代の浅間大神の本地仏として平安時代から室町時代にかけての富士山信仰を如実に現わしている貴重な三昧の大日如来で村山修験者によって造立されている。

甲斐の富士山修験

富士山の南面(駿河側)の村山に対して、北面の甲州側の修験の拠点となったのが富士山二合目の御室である。同所に鎮座する浅間神社は甲州側の山体にあって、最初に勧請された浅間神社と伝えられている(『甲斐国志』巻71ほか)。江戸時代後期には二合目神社を「小室浅間明神」、里宮を「富士浅間明神」(『甲斐国志』)という。江戸末期には二合目神社を「富士山北口本宮浅間社」、里宮を「里宮浅間宮」(『甲斐国志、社記・寺記』)と呼んでいる。現在では富士御室浅間神社という総称で、本宮と里宮と称している(『勝山村史』下巻)。本宮の鎮座した地は、富士河口湖町勝山3951の1番地にあたる。周囲は富士吉田市であるが、現在ここは勝山の飛び地になっている。この一帯には、富士御室浅間神社を中心に円楽寺(甲府市右左口)とかかわりのあった行者堂、西念寺の子院である定禅院などがあり、富士山登拝に係る信仰拠点の一つとして重要な役割を果たしてきた場所である。この二合目の地を「御室」と称するが、前述の通り『甲斐国志』は「小室浅間明神」とあり『勝山記』には「富士山北室」「山室」などと地名を呼んでいる。一般に「室」(むろ)というのは、山腹にある窟(いわや)を指している。とくに修験の人達にとってムロは窟を意味し修行の場所である。山梨市の地名「室伏」は甲斐金峰山で修行する山伏の窟または洞穴のあったところであり、最近の調査では牧丘周辺にはその室といわれる洞穴が多く確認されている。

また、山梨県富士山総合学術調査研究委員会によると、この富士山二合目は、古富士火山体の地質が地表近くに現れる地に接し、地質学的にも安定した基盤に近い土地とみなされている。本宮境内地には古富士を形成する基盤に三方を囲まれた平坦地であるとともに、境内の西側に沿って浅い谷がある。岩盤を河床とする谷からは水を得ることができる。さらに岸部付近には湧水箇所もあり、飲料水として用いられていたという(『史跡富士山調査報告書』)。

このように安定した基盤と水の利便に恵まれた土地であり、伝承からもこの土地が湧水の限界であることが明らかである。

この御室浅間神社の境内には、それぞれ鎌倉時代の文治5年(1189)と建久3年(1192)の紀年銘をともしなう日本武尊と女神の二像が伝わっていた(『甲斐国志』巻71)。また国志によると両像ともに走湯山の覚実覚台坊により造立されており、北面における信仰拠点の開創にも伊豆山修験が関与していたことが明らかである。更に国志の記事をみると、日本武尊の像は3尺2寸5分で髪は左に垂れ、容貌は不動尊に似ていることが記されていた。一方の女神像は合掌した神像で1尺6寸5分であることが記されている。富士山に祀られた女神としては最も古い像であるが、現在両像とも行方不明である。御室浅間神社から出された安政6年(1859)の江戸での

御開帳願いにこの像のことが記されており、更に慶応4年(1868)の段階でも神宝として日本武尊像は里宮に移されていることが明らかである(『甲斐国社記・寺記』)。

近年村山浅間神社における発掘調査では竪穴住居跡と溝が検出されたが、これにともなう9世紀後半から10世紀前半の甲斐型土器や灰釉陶器が出土して南・北両面にまたがる回峰ルートが存在にも疑いない。従って江戸時代に盛行した中道巡りの淵源もこのころからのものと考えられる。

富士御室浅間神社には「役行者堂」が存在し、前述した役行者像及び二鬼像が祀られていた(『甲斐国志』巻71)。また慶応4年の時点でこの御室の地に御本社・弊殿・拝殿が記されており、他に二ノ宮・末社・護摩堂の記載があった。護摩堂については「是ハ七覚山円楽寺古例ニテ出勤仕候」とあり、この社地は拾町四方という広い境内地を有していたことを記している。この護摩堂というのは行者堂のことで役行者及び二鬼像を本尊とする御堂で円楽寺が兼帯し、6・7月は円楽寺の僧侶が護摩を修法していたことが記されている(『甲斐国志』巻72)。

この行者堂に祀ってあった「役行者及び二鬼像(現在円楽寺所蔵、県指定文化財)」は坐高83cmで12世紀から13世紀の制作と考えられ、木像役行者像として現在最古の遺例である。作者については康慶周辺の南都系仏師とする指摘がある。また甲州側から富士山に向かう御坂峠の盆地側の鞍部近くに役行者像を祀る神変堂(行者堂)があった(『甲斐国志』巻24)。祭祀をつかさどったのは大善寺(甲州市勝沼町)で同寺に現存する鎌倉時代末期の役行者像(山梨県指定文化財)が安置されていたのを、武田信春の時代に大善寺に移したと伝えている(『甲斐国志』巻75)。大善寺には毎年四月十四日(現在五月八日)「藤切り祭」という修験による会式が伝わっている。役行者を祀る六所明神堂の前で修験によって修行されている。また甲府市右左口の七覚山円楽寺にも『甲斐叢記』によると江戸時代まで「真切」と呼ばれる藤切り祭が伝わっていたが、現在は途絶している。両方共に富士山の行者堂と係わりがあり修験者による富士山信仰に起源をもつ貴重な民俗行事とみてよい。

富士河口湖町大嵐に所在する蓮華寺(日蓮宗)は大同山御堂寺と称する真言宗寺院として創立。弘法大師創造といい役小角は此の山に來りて修法する山といい、背後に聳える「だんの山」(檀山足和田山)の頂上は奥院と呼ばれた(『甲斐国志』巻90)。平成23年度の蓮華寺奥の院跡伝承地の調査で二間二間程度の礎石の石が確認され、他は燈明皿が1点出土した。この一帯が修験の行場であったことを伝えている。『甲斐国志』の編纂に際して作成された大嵐村の絵図には、檀山の山頂に「法印塚」を記するとともに門前を横断して東方の富士山へと延びる道に「富士山とうしや(道者)道」と注記している。この道が『甲斐国志』が「七覚山」の頂において「相伝テ云、昔役小角富士登山ノ時、此处ヨリ発シ、迦葉。阿難ノ二嶺ヲ踰テ、精進・西海・長浜・大嵐・大田和・成沢数村ヲ経テ直ニ御室ニ達ス」とあるが甲府盆地南東辺と富士山二合目を直結する通路である(『富士山』小学館)。途上にある十二岳にも役行者にまつわる伝承もある(『甲斐国志』巻26)。

このように富士山周辺には役行者伝承が多くあり、また二合目・御坂峠に伝わる役行者像をみるにつけ修験による登拝が早く平安時代の初めからみられたことを物語っている。

富士山の北面甲州側の忍野村には、忍草浅間神社と内野浅間神社の別当は、当山派又は本山派の修験であったと考えられる。両社には大日如来像が伝わる。忍草浅間神社には、鎌倉時代正和4年(1315)造立の女神像(仏師丹後国住人石見坊)を含む3軀の神像がある。仏像は忍草浅間神社の別当東円寺(現天台宗)に文保4年(1320)仏師静存造立の聖観音坐像と2軀の浅間大菩薩の本地仏である金剛界大日如来像を伝えている。1軀は天正6年(1578)造立の金剛界大日如来で、像高33.1mの智拳印を結んだ像である。もう1軀の金剛界大日如来は平安時代に遡る。像高34.5cmの像で、智拳印を結んでいる。東円寺は鎌倉時代初頭までは真言宗で、南泉寺と称した。その後、正治元年(1199)に天台宗東円寺となった。これらの仏像は、明治初年の廃仏毀釈により浅間神社から移された仏像である。大日如来もその時に移されたと考えられる。また『甲斐国志草稿』(柏木本)によれば、浅間神社には大日堂が存在したことが記されていることなどから、平安時代末期から明治時代初年まで浅間神社には大日如来が祀られていたことは明らかである。また、内野浅間神社の別当寺は、現在は臨濟宗である承天寺の前身であった本山派修験の光学院が別当寺であった。その内野浅間神社に像高10.7cmの蓮華座まで含

む一木造の大日如来坐像が伝わっている。本来は懸仏の本尊であったと思われる。仏像は法界定印を結ぶ胎像界大日如来で、鎌倉期に造立された像で、現在でも木花咲耶姫命と呼ばれ、本社の御神体として祀られている。

甲州の富士山修験の特徴

国中で富士山にかかわる修験の寺院は円楽寺(甲府市右左口)、円楽寺の末寺大福寺(中央市)、大善寺(甲州市)そして福光園寺(笛吹市)などが数えられる。共に真言宗寺院であることから、一般には甲州側の富士山修験は当山派、駿州側の富士山修験は本山派と言われてきたが、実際には分けることは難しい。

甲州国中の富士山修験の寺の特色は、鎮守に五社権現・七社権現があるが必ず伊豆権現がお祀りしてあることである。円楽寺も大善寺にも五社権現があり伊豆権現をお祀りしている。とくに大福寺の鎮守七社権現は平安時代後期 11 世紀の尊像である。その尊像は熊野三所、金峰、白山、伊豆、箱根の七社をお祀りしているが、神像は雨乞いに用い、やっとな原形をとどめている。

また郡内では岩殿山円通寺がある。この寺は天台宗で常楽院・大坊が修験の大きな権力をもった本山派修験道である。この寺の鎮守である七社権現(県指定文化財)は、15 世紀初頭のもので、伊豆権現を合祀している。また、文明 19 年(1487)に聖護院門跡道興が入峽して岩殿山円通寺、柏尾山大善寺、右左口の円楽寺など伊豆権現とかかわりをもった寺を巡行していることが道興の紀行文『廻国雑記』にみえるが、これまた富士山修験の寺院を巡錫しているように考えられる。甲州における富士山修験は伊豆山からの村山修験の影響を受けて発達したように考えられる。